

保育実習に関する不安調査からの一考察

岩 崎 桂 子

A Consideration from Researches of Anxieties about Childcare Practices

IWASAKI Keiko

キーワード：保育実習・不安・因子分析

I. はじめに

保育実習は、保育士資格を取得するために必要な単位である。保育士資格では、保育所、保育所以外の福祉施設、及び関連施設での現場実習が2年間で36日間以上が求められる（合計5単位、実習の事前事後指導も含む）。

保育士養成校に在籍する学生にとって、保育実習は、大きな意味を持っている。保育実習とは普段関わることのできない子どもたちや、利用者と関わるができる場であると同時に、学校内では得ることのできない学びを得ることのできる重要な場である。実際に子どもに接する体験を通して、校内で学習する教科全体の知識、技能の理解を基盤として、総合的に実践し応用力を養う、という教科目の一つである。また、この実習を通して将来の保育者としての自分を思い描いたり、保育者として足りない部分を補うために、積極的に学習や技術の習得に励むという、今後の学校生活にも大きな意味を持っている。

一方、学生たちにとって、実習前、実習中、実習後の各過程において、学校内、実習現場から評価を受けるという非常に緊張を強いられる科目である。そのため、実習前の学生からは、「行きたくない」、「不安」という実習に対しての消極的な意見も多く聞こえてくる。このような、緊張状態

で実習を行うと子どもや利用者に関わりが持てなかったり、消極的という評価を受けて、保育者になる自信を失ってしまうケースも少なくない。中には、実習を連続で欠席してしまったり、体調を崩したりする等して、実習自体を中止せざるをえない状況に陥るケースもある。このような、心理的不安を抱えたまま実習を行うことで、本来は学びの多い実習を送る機会であるのに、実力を発揮できずに終わってしまうというケースも多く見受けられる。村田・岡本らの先行研究(2004)^{注1)}では、保育実習の不安が保育の学習に影響があるという報告もある。三好(2005)の研究では、学生生活に対する勤勉な態度や意欲、充実したと感じられる学生生活など、積極的な姿勢が実習に対する姿勢のベースとなって影響を与えている^{注2)}、という研究結果もある。不安感や学生生活が保育の学習に影響があるということは、学校の授業を欠席する、実習の準備を怠る、授業内容が実習で生かされないという負の影響も考えられる。

このような状況を避けるためにも実習に対する不安軽減に努める必要があると考えられる。また、そのための実習事前・事後指導の在り方、実習指導の授業の進め方など、様々な対応が必要だと考えられる。また、日々変化する保育所の求める保育者像に即した保育者を養成するためにも学生の実態、実習に対するとらえ方と学生の性格傾向を把握することが保育実習担当教員としての職務だと考えられる。

実習とストレスに関する先行研究として古屋・音山・坂田 (2005)^{注3)} や音山 (2002)^{注4)}、鈴木・水田 (2002)^{注5)}、などがあげられる。しかしながら、保育実習と不安の関連についてはあまり研究が進んでいない現状がある。このことから、今回の研究では、学生の性格や不安傾向、具体的に実習の不安要因は何かを探ることで学生の理解、保育実習に対する不安について検討したい。学生の性格傾向を知る理由として、保育者は子どもの命を預かる仕事であると同時に保護者のニーズに対応していくという、子どもと保護者の援助を行うため、資質・適性は重要であると考えられるからである。そのために YG 性格検査を使用し、因子別で保育実習における不安はどういったものを理解する。また、STAI を使用し、今ある不安は実習に対するものなのか、学生が本来持っている不安傾向かどうかを明らかにし、保育実習の何が不安なのかを探ることとする。

以上のことから、本研究では、実習に対する学生の不安軽減及び授業の進め方を検討するための予備調査として、本校に在学する学生の性格傾向と不安度について研究することを目的とする。

II. 方法

1. 調査の概要

調査対象：東萌保育専門学校、1年生 31名である。

内訳は男子 6名、女子 25名である。保育所実習に対する不安を調べるために、本校の実習日時に合わせて調査を行った。

2. 調査方法

調査日：2008年2月下旬である。

調査方法：授業時間内に学生に質問紙を配布し、教員が質問項目を読み上げ、回答を記入するという方法をおこなった。

質問紙は村田・岡本他の作成した保育実習に対する不安とその背景に関する調査 (2004) から保育実習に関する項目 35項目を抜粋したもの、YG 性格検査、STAI、を使用した。保育実習に対する不安とその背景に関する調査を保育実習に対する不安とし、因子分析を行い、3種類の質問紙の結果から相関を行う。

III. 結果

1. 保育実習に対する不安調査の因子分析について

(1) 保育職について

全 10項目の質問項目の因子分析を行った結果、表 1 のとおり 3種類の因子に分類することができた。

表 1 保育職について

	1	2	3	共通性
1. 保育職への適応感 ($\alpha = .824$)				
③保育の仕事をするのが楽しみだと思うこと☆	.887			.760
①保育の仕事にやりがいを感じる☆	.753			.611
⑤将来、保育職に就こうと思うこと	.695			.543
④自分にとって保育職は適していると思う☆	.554			.557
2. 学習への満足感 ($\alpha = .724$)				
⑩保育に関する勉強が煩わしいと思うこと		-.826		.541
⑥保育について学ぶことが楽しいと思う☆		.574		.515
⑦保育の授業に満足している☆		.530		.491
3. 学習への拒否感 ($\alpha = .725$)				
⑧保育の学習に伸びが無いと感じること			.962	.532
⑨保育の学習に負担を感じる☆			.446	.617
回転後の負荷量の合計	2.353	1.755	1.462	
累積%	26.146	45.646	61.893	

主因子法バリマックス回転

☆ = 逆転項目

第一群は保育職への適応感を表わし ($\alpha = .824$)、該当項目はNo.1、No.3、No.4、No.5である。また、逆転項目はNo.1、No.3、No.4である。

第二群は学習への満足感を表わし ($\alpha = .724$)、該当項目はNo.6、No.7、No.10である。また、逆転項目はNo.6、No.7である。

第三群は学習への拒否感を表わし ($\alpha = .725$)、該当項目はNo.8、No.9である。

(2) 子どもへの気持ちや思いについて

全10項目の質問項目の因子分析を行った結果、表2のとおり2種類の因子に分類することができた。

第一群は子どもへの肯定的感情を表わし ($\alpha = .897$)、該当項目はNo.2、No.3、No.4、No.5である。

第二群は子どもへの否定的感情を表わし ($\alpha = .839$)、該当項目はNo.6、No.7、No.8、No.9、No.10である。

(3) 保育実習において不安に感じることに
全10項目質問項目の因子分析を行った結果、表3のとおり3種類の因子に分類することができた。

第一群は対人接触への不安を表わし ($\alpha = .856$)、該当項目はNo.5、No.6、No.8、No.9、No.10である。

第二群は保育技術への不安を表わし ($\alpha = .692$)、該当項目はNo.2、No.3、No.4、No.8である。

第三群は保育場面以外の不安を表わし ($\alpha = .623$)、該当項目はNo.1、No.4、No.7である。

また、これらはすべて逆転項目である。

表2 子どもへの気持ちや思い

	1	2
1. 子どもへの肯定的感情 ($\alpha = .897$)		
②子どもと遊ぶのが好き	.962	
⑤子どもの笑顔が好き	.962	
③子どもと接するのが楽しい	.903	
④子どもの世話をするのが好き	.645	
2. 子どもへの否定的感情 ($\alpha = .839$)		
⑧私の指導に反発するかもしれない		.867
⑦私と遊んでくれないかもしれない		.817
⑥言うことを聞いてくれないかもしれない		.751
⑨子どもの反応が少ないかもしれない		.736
⑩子どもの考えがわからないかもしれない		.708
回転後の負荷量の合計	3.181	3.127
累積%	33.345	70.085

主因子法バリマックス回転

表3 保育実習において不安に感じること

	1	2	3	共通性
①実習日誌を書くことへの不安			.563	.450
②ピアノや造形の技術への不安		.565		.353
③手遊びや紙芝居への不安		.705		.509
④教材づくりや指導案作成への不安		.429	.661	.583
⑤一人一人の子どもへの接し方の不安	.747			.651
⑥子どもと一緒に遊ぶことへの不安	.681			.612
⑦子どものけんかへの対応			.559	.417
⑧みんなの前で話すことへの不安	.489	.579		.552
⑨実習先の先生との接し方の不安	.812			.688
⑩保護者との接し方の不安	.931			.776
回転後の負荷量の合計	2.905	1.502	1.308	
累積%	29.049	44.072	57.153	

主因子法バリマックス回転
すべて逆転項目

(4) 実習への気持ちについて

主成分分析により1成分構造が確認された ($\alpha = .710$)、No.1、No.3、No.4は逆転項目である。

2. YG性格検査と保育実習に対する不安の相関

YG性格検査と因子分析を行った保育実習に対する不安の相関係数を求めた結果、表4のとおりになった。YG性格検査の12因子と保育実習に対する不安の相関では、抑うつ性と子どもへの否定的感情と保育場面以外の不安、両方で正の高い相関 ($P < .05$) が得られた。抑うつ性が高い場合、子どもに対して否定的な感情を持つと同時に保育実習における保育の場面以外では不安を感じない傾向がみられた。気分の変化大は子どもへの否定的感情で正の高い相関 ($P < .01$) が得られた。また、気分の変化大と保育場面以外の不安では負の ($P < .05$) 相関が得られた。気分の変化が大きい場合、子どもへの否定的感情を持ちながらも保育実習において保育以外の場面では不安に思わない傾向がみられた。劣等感

は子どもへの否定的な感情が正の高い相関 ($P < .01$)、保育実習における保育技術と負の高い相関 ($P < .01$)、保育場面以外の不安と負の相関 ($P < .05$) が得られた。劣等感が強いと子どもに対して否定的な感情を持つものの、保育技術や保育以外の場面での不安は低いことがわかった。神経質では保育の学習拒否感と正の高い相関 ($P < .01$)、子どもへの否定的感情と正の相関 ($P < .05$)、保育実習への気持ちと正の高い相関 ($P < .01$) が得られた。これは、神経質であると保育実習自体に高い不安があり、そのため子どもに対して否定的な感情を抱き、保育の学習に拒否感を持つ傾向にあることがわかった。主観的は子どもへの否定的な感情と正の相関 ($P < .05$) が得られた。非協調的は子どもへの否定的感情と正の相関 ($P < .05$) が得られた。活動的は保育職適応感と負の相関 ($P < .05$) が得られた。思考的外向は子どもへの否定的感情と負の相関 ($P < .05$)、保育実習における保育以外の不安と正の相関 ($P < .05$) が得られた。支配性は保育職適応感と負の相関 ($P < .05$)

表4 YG性格検査と保育実習に対する不安

YG	保育実習に対する不安								
	I. 保育職について			II. 子どもへの気持ち		III. 保育実習において不安に感じる事			IV. 実習への気持ち
	保育職適応感	学習満足感	学習拒否感	肯定的感情	否定的感情	対人接触	保育技術	保育以外	
抑うつ性	-.154	-.144	.194	.279	.544**	-.136	-.245	-.617**	.017
気分の変化大	-.047	.161	.249	.178	.466**	-.065	.071	-.365*	-.008
劣等感	.126	-.078	.342 ⁺	.009	.579**	-.314⁺	-.589**	-.694**	.366*
神経質	.041	.296	.553**	-.237	.387*	.025	-.217	-.272	.371**
主観的	-.110	-.042	.280	.100	.378*	-.285	-.075	-.319⁺	-.092
非協調的	-.167	.118	.295	-.098	.434*	-.246	-.037	-.160	.035
攻撃的	-.296	.186	.164	.019	.045	-.139	.256	.251	-.244
活動的	-.364*	-.054	-.147	.328⁺	-.223	.131	.128	.135	-.193
のんき	-.169	.126	-.046	-.025	.000	.066	.236	.055	-.018
思考的外向	-.119	.167	-.270	-.157	-.377*	.104	.247	.362*	.034
支配性	-.391*	-.053	-.211	.214	-.242	.268	.207	.117	-.219
社会的外向	-.344⁺	.059	-.170	.331⁺	-.194	.281	.107	-.017	.001
<群因子>									
情緒不安定	-.014	.071	.441*	.074	.650**	-.161	-.331⁺	-.645**	.248
社会的不適応	-.278	.125	.347⁺	.017	.392*	-.316⁺	.080	-.095	-.156
活動的	-.406*	.072	-.001	.224	-.119	.005	.230	.232	-.265
衝動的	-.352⁺	.038	-.129	.211	-.154	.130	.230	.126	-.144
内省的でない	-.172	.174	-.186	-.107	-.220	.101	.288	.245	.009
主導的	-.388*	.003	-.201	.287	-.230	.290	.166	.053	-.116

** : p<.01 * : p<.05 + : p<.10

が得られた。YG 性格検査の群因子と保育実習に対する不安の相関では、情緒不安定と学習拒否感は正の相関 ($P < .05$) が得られた。情緒不安定と子どもへの気持ちの否定的感情では正の高い相関 ($P < .01$) が得られた。情緒不安と保育実習において不安に感じることの保育以外の不安で負の高い相関 ($P < .01$) が得られた。これは、情緒不安定な傾向にある場合、保育の学習や子どもへの拒否的、否定的な感情を抱きやすい傾向にあることがわかった。また、保育実習において保育場面以外の事に対して、あまり不安に感じない傾向にあることがわかった。社会的不適応と子どもへの否定的感情で正の相関 ($P < .392$) が得られた。これは、社会的不適応にある場合、子どもに対して否定的感情を抱きやすい傾向にあることがわかった。活動的と保育職適応感では負の相関 ($P < .05$) が得られた。これは、活動的な学生の場合、保育職に対してあまり適応感を感じていない傾向にあることがわかった。主導的と保育職適応感で負の相関 ($P < .01$) が得られた。これは負の相関であることから、主導的な学生は保育職に対してあまり適応感を持っていないことがわかった。

3. STAI と保育実習に対する不安の相関

STAI の状態不安、特性不安と因子分析を行った保育実習に対する不安の相関を求めた結果、表 5 のとおりとなった。

状態不安と子どもへの否定的感情が正の相関 ($P < .05$)、保育実習における対人接触で負の相関 ($P < .05$)、保育実習において保育以外の不

安で負の相関 ($P < .05$) が得られた。特性不安と子どもへの否定的感情と正の高い相関 ($P < .01$)、保育実習における対人接触と負の相関 ($P < .05$)、保育実習における保育技術の不安と負の相関 ($P < .05$)、保育実習における保育場面以外の不安と負の相関 ($P < .05$) が得られた。

IV. 考察

(1) YG 性格検査と保育実習に対する不安の相関について

今回の調査から、本校の学生の性格傾向と保育実習に対する不安の関係を知ることができた。表 4 から情緒が不安定な場合保育の勉強や子どもへの否定的な感情はあるものの、保育実習自体についての不安を感じない傾向にある。また、社会的不適応でも子どもへの拒否的的感情と相関が出ていることから、子どもが自分を受け入れてくれないかもしれないという不安があるのではないかと考えられる。子どもという予想外の行動を起こす可能性があるものに対して、どう対処してよいかわからない不安があるのではないだろうか。それに対し保育実習における保育技術や保育以外の場面で不安が低い傾向にあるのは、ピアノや造形のようにどのような内容のものか、ある程度予想ができるものに対しては練習や今までの経験を生かすことで乗り切れるという観念があるのではないかと考えることができた。さらに、劣等感の高さや神経質な傾向でも同じような結果が出ていることから、保育者になるための学校での授業では子どもを相手にするため、決まった答えもなく、実習

表 5 STAI × 保育実習に対する不安

STAI	保育実習に対する不安								
	I. 保育職について			II. 子どもへの気持ち		III. 保育実習において不安に感じる事			IV. 実習への気持ち
	保育職適応感	学習満足感	学習拒否感	肯定的感情	否定的感情	対人接触	保育技術	保育以外	
状態不安	-.102	-.237	-.013	-.006	.383*	-.394*	-.233	-.405*	-.020
特性不安	.004	-.078	.219	-.139	.484**	-.395*	-.376*	-.455*	.212

** : $p < .01$ * : $p < .05$

先の保育方針に臨機応変に合わせて対応していく必要があることを度々聞くことで、拒否感情を喚起し、子どもや学習への拒否的感情を持ってしまっているのではないかと考えられた。

次に活動的、支配的と保育職への適応感で負の相関があることから、因子分析の結果、逆転項目であることから比較的内向的な者の方が保育職への適応性を感じやすいのではないかと推測される。この結果には学生の保育者に対するイメージと関係があるように思われる。学生が保育者を目指すきっかけとして挙げられる理由で最も多いのは、自分が通っていた保育所の先生が優しかったから、職業体験で出会った保育者がいつも笑顔で子どもを見守る保育をしていたから、という理由が述べられる。このことから、学生にとって保育者のイメージとは子どもを強引に保育しない、大きな声で話さない、子どもを叱らないというイメージから保育職への適応感が高いという結果につながったのではないかと推測される。

次に、有意な結果ではないが、活動的、社会的外向の高い者は子どもに対して肯定的な感情を抱きやすい傾向にある。資料1の子どもへの肯定的感情の質問内容から活動的、外向性の高い者は子どもと遊ぶことやお世話をすることが好きで、苦に思わないのではないだろうか。保育者を目指す学生のほとんどが以前に多かれ少なかれ子どもと関わった経験があったり、兄弟の面倒を見た経験がある者が多い。自分から子どもに関わっていく術を身につける場面を数多く経験し、ダイナミックな遊びが子どもに好まれることを経験していることと関係があるのではないかと考えられる。しかしながら、有意な差として結果が得られなかった背景には、子どもが好き、子どもと接するのが楽しいという本来ある感情に、実習では子どもと積極的に関わらなくてはいけない、子どもと関わる以外の仕事をしなくてはいけない、という思考によるもので実習評価につながるという視点からではないかと思われる。

(2) STAIと保育実習に対する不安の相関について

状態不安とは、不安を喚起する事象に関する一過性の状況反応である^{注6)}。今回は保育実習に対するものであり、保育実習を目前に控えて、今まさにどう感じているかを査定するものである。特性不安とは脅威を与えるさまざまな状況に対して同じように反応する傾向^{注6)}であり、普段どのように感じているかを査定するものである。以上のことを踏まえ、STAIと保育実習に対する不安の相関の考察を行う。

状態不安、特性不安ともに子どもへの否定的な感情と正の相関が得られている。保育者という仕事は子どもと接すること、子どもたちにいうことを聞かせないといけないという観念から否定的な感情が生まれるのかも知れない。また、状態不安、特性不安ともに保育実習においた対人接触、保育場面以外での実習で負の相関が得られている。特性不安においては保育実習における保育技術とも負の相関である。このことから、保育実習=子どもと関わるということに重点を置くことで、その他の実習内容、実習日誌の記入や実習先の先生や保護者との接し方が見えていないのではないかと考えられる。保育実習や保育者の仕事内容の全体が理解できず、ごく一部しか意識が向いていないように思われる。この結果の背景として、調査対象が1年生であり、保育実習が初めてであることも関係していると推測される。実習というものの全体的な流れが見えずに、保育=子どもに捉われ過ぎているように感じられた。その結果、子どもに受け入れてもらえるか、子どもの反応があるかなどが不安に感じるのではないだろうか。

また、保育実習が不安という感情より面倒、行きたくない、何が不安かわからない、という学生の意見も関係しているのではないか。保育実習の不安に関する調査の最後に具体的に何が不安かを自由記述で求めたところ、寝坊、実習先の先生にいじめられないか、全部、実習先の先生に怒られたらどうしよう、体調管理ができるか、というよ

うに保育実習以前の実習生としての心構えを不安に感じている傾向が強いのではないかと思われる。

V. まとめ

今回の研究は本学の学生で1年生を対象として、保育実習に対する不安について研究を進めた。保育士養成校に入学する学生は子どもが好き、卒園した保育園の先生が好きだった、という理由で入学を決めることが多い。しかし、保育者の仕事は子どもと遊ぶだけでなく、掃除や指導案の作成、壁面の製作、保護者対応と子どもに関わる以外の様々な仕事内容がある。また、遊びにしても保育者は子どもの発達や成長を見据えて目標を立て、保育を進めていく。保育者の行動・言動・関わりには意味と目的が存在している。この保育者の職務についての理解が1年生の学生には低い傾向にあるように感じられた。また、実習という得体の知れないものに対して、具体的な不安というより、漠然とした不安が高いことが明らかとなった。

さらに、学生のほとんどが19歳～20歳前後という思春期から青年期への移行時期にあることから、自分を客観的にみることが難しく、物事を全体として捉えることが難しいのではないかと思われる。また、社会に出た経験がほとんどないことから、仕事というものに対する不安感もあるのだろう。それは、保育実習に対する不安に関する調査の自由記述にも表れていた。寝坊、欠席、体調管理、提出物を提出する、という実習以前の問題を不安に思う傾向を裏付ける結果である。

本校では、夏休みや冬休みの長期休暇中に保育所や福祉施設でのボランティア活動やアルバイトを促している。そのねらいとして、保育所の一日の流れや、子どもとの関わり方、保育者の仕事を知るということをねらいとしている。しかし、保育所の都合や学生の都合により全員が満足のいくボランティアやアルバイトが出来るわけではない。また、保育士の資格は取りたいが、行動に移

せない学生がいるのも事実である。そういった学生は保育の学習に対する拒否感が高い傾向にあることと関連があるのだろう。

保育実習は、学校の教員から評価を受けるのではなく、実習先の先生から評価を受けるため不安だけでなく恐怖心が先に立つ傾向があることがある。また、保育実習は必須教科であるため、単位が取得できないと進級、資格取得に影響が出てくる、ということもプレッシャーになり、実習に行きたくないという言葉として表れてくるのだろう。

これらの結果から、保育実習担当教員として、今後の学生指導が大きな役割を担うことは明らかである。授業で社会人としてのルールを理解させることは勿論、保育の本質、保育の意味、保育者の仕事内容などについてさらに深い講義を行う必要がある。さらに、保育理論や定義が実際の保育現場でどのように応用されているかを知るためにも、今後もボランティアやアルバイトの斡旋は行っていく必要がある。また、保育の仕事は体力的にも精神的にもきつい仕事ではあるが、その中でも仕事に対するやりがいや楽しさ、喜びがあることを多く伝えていくことが重要であると感じた。また、この役目が保育園での保育者としての職歴を持つ自分の役目であることを、改めて感じ、強く思った。保育の授業を「満足感」の得られる内容に改善していく必要がある。そのためにも、現在の学生の傾向、生活など広範囲にわたり理解する努力が必要であるだろう。

今後の研究課題として、一年次の実習に対する不安が二年次になったときに、どのように変化するのか、不安内容が具体化されているのか、さらには、就職先決定とどのような関連があるのかなど、長期的に調査を進める必要がある。

注

- 1) 村田務・岡本美智子・小林義郎・海野阿育「保育実習への不安状況に関する調査」『白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報』No.9, 2004年
- 2) 三好環「保育実習後の学生の能力感と意欲」『畿央大学短期大学部研究紀要』第26号, 2005年, P41
- 3) 古屋健・音山若穂・坂田成輝「教育実習生の心理的ストレス・プロセスの縦断的分析」『群馬大学教育学部紀要』第54巻, 2005年
- 4) 音山若穂「児童福祉施設実習生の実習ストレスと緩衝要因およびストレス・プロセスと自己評価の関連」『保育士養成研究』第20号, 社団法人全国保育士養成協議会, 2002年
- 5) 鈴木隆男・水田和江「実習とストレスとの関係に関する研究」『保育士養成研究』第20号, 社団法人全国保育士養成協議会, 2002年
- 6) 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Charles D.Spielderger「新版STAIマニュアル」実務教育出版, 2008年, P5

機能の視点から一」『大阪薫英女子短期大学児童教育学科紀要』第9号, 2003年

- 6) 佐野美奈「保育実習（保育実習Ⅰ）における実習評価に関する一考察」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』第7号, 2008年
- 7) 渡邊ユカリ「保育実習指導の課題について—保育所の実習指導担当者への調査からの考察—」『秋草学園短期大学紀要』第19号, 2002年
- 8) 古賀愛人「状態不安と特性不安の問題」『心理学評論』Vol.23, No.3, 1980年
- 9) 大野木裕明・宮川充司「教育実習不安の構造と変化」『教育心理学研究』第44巻, 第4号, 日本教育心理学会, 1996年
- 10) 植田智「保育実習におけるストレス」『鳥取短期大学研究紀要』第46号, 2002年
- 11) 坂田成輝・音山若穂・古屋健「教育実習生のストレスに関する一考察—教育実習ストレスサー尺度の開発—」『教育心理学研究』第47巻, 第3号, 日本教育心理学会, 1999年
- 12) 豊田典子・渡辺勤・中橋美穂・柏原栄子「保育実習における教員の実習指導への取り組み—2001年度保育所実習後のアンケート結果から—」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』第8号, 2002年
- 13) 須藤らん子「保育者の資質に関する一考察（その1）—保育者養成校から見た学生の一考察—」『武蔵野短期大学研究紀要』第17輯, 2003年
- 14) 原信夫「保育実習に関する不安について」『清和大学短期大学部紀要』35巻, 2006年
- 15) 卜田信一郎・植田明「本学学生の幼稚園教育実習に対する意識（第1報）—実習に対する不安と期待を中心に—」『常磐会短期大学紀要』Vol.31, 2002年
- 16) 卜田信一郎・植田明「本学学生の幼稚園教育実習に対する意識（第2報）—実習に対する不安と期待を中心に—」『常磐会短期大学紀要』Vol.32, 2003年

参考文献

- 1) 竹村壽美子「実習体験を通して育つもの—幼稚園教育実習における保育科学生の姿—」『四天王寺国際仏教大学紀要』第42号, 2006年
- 2) 加納学「主成分分析」『京都大学大学院工学研究科化学工学専攻プロセスシステム工学研究室』2002年
- 3) 清水彩香・松永あけみ・古屋健「保育実習生の心理的ストレスとストレスサーに関する予備的研究」『群馬大学教育実践研究』第25号, 2008年
- 4) 倉田新・井戸ゆかり「保育実習からみた保育士養成校の課題と展望」『東横学園女子短期大学紀要』通号40, 2006年
- 5) 木村容子「保育士養成課程施設実習指導のあり方に関する考察—スーパービジョンの媒介

資料1 保育実習に対する不安に関する調査

以下の質問についてあてはまる数字を書きなさい。

I. 保育職について、日頃次のように感じたり、思ったりすることがありますか？

< 1. よくある 2. 時々ある 3. どちらとも言えない 4. ほとんどない 5. 全くない >

- ①保育の仕事にやりがいを感じる事 ()
- ②保育の仕事が社会に役立っていると思うこと ()
- ③保育の仕事をするのが楽しみだと思うこと ()
- ④自分にとって保育職は適していると思うこと ()
- ⑤将来、保育職に就こうと思うこと ()
- ⑥保育について学ぶことが楽しいと思うこと ()
- ⑦保育の授業に満足していると思うこと ()
- ⑧保育の学習に伸びが無いと感じること ()
- ⑨保育の学習に負担を感じる事 ()
- ⑩保育に関する勉強が煩わしいと思うこと ()

II. 子どもへの気持ちや思いはどのくらいありますか？

< 1. 強く思う 2. 少し思う 3. どちらでもない 4. ほとんど思わない 5. 全く思わない >

- ①子どもがかわいい ()
- ②子どもと遊ぶのが好き ()
- ③子どもと接するのが楽しい ()
- ④子どもの世話をするのが好き ()
- ⑤子どもの笑顔が好き ()
- ⑥言うことを聞いてくれないかもしれない ()
- ⑦私と遊んでくれないかもしれない ()
- ⑧私の指導に反発するかもしれない ()
- ⑨子どもの反応が少ないかもしれない ()
- ⑩子どもの考えが分からないかもしれない ()

III. 保育実習において次のことに不安を感じることがありますか？

< 1. 強くある 2. 少しある 3. どちらとも言えない 4. ほとんどない 5. 全くない >

- ①実習日誌を書くこと不安 ()
- ②ピアノや造形の技術の不安 ()
- ③手遊びや紙芝居の不安 ()
- ④教材づくりや指導案作成の不安 ()
- ⑤一人一人の子どもへの接し方の不安 ()
- ⑥子どもと一緒に遊ぶこと不安 ()
- ⑦子どものけんかへの対応 ()
- ⑧みんなの前で話すこと不安 ()
- ⑨実習先の先生との接し方の不安 ()
- ⑩保護者との接し方の不安 ()

IV. 次のような気持はどのくらいありますか？

< 1. 強くある 2. 少しある 3. どちらとも言えない 4. ほとんどない 5. 全くない >

- | | |
|-------------------|------------|
| ①保育実習が楽しみという気持ち | () |
| ②保育実習が不安という気持ち | () |
| ③保育実習がうまくいくという気持ち | () |
| ④早く保育実習をしたいという気持ち | () |
| ⑤保育実習をしたくないという気持ち | () |

V. そのほかにどのようなことを不安に思いますか？自由に書きなさい。

(東萌保育専門学校専任教員 岩崎桂子)